人のぬくもりとふれあいが奏でる躍動のまち　丹波高原文化の郷（さと）●京丹波

京丹波

No.22
2007年
8月15日発行

熱投―。
ナインの思い、白球にのせて

特集 食育

特集

食育

良く食べて、体も心も元気に

今月の表紙

夏の全国高校野球選手権京都大会で3回戦進出の健闘をみせた地元須知高野球部。厳しい練習を積んできた部員たちが力の限り戦う雄姿は、応援にかけつけた保護者や同級生たちに感動を与えました。白球にかけた３年生の熱い思いは、後輩たちに引き継がれていきます。（西京極球場、京都市右京区）

最近、「食育」という言葉をよく耳にしますが、「食育」とはいったい、どういうものなのでしょうか。

わが国では、近年の食習慣の乱れや食の安全志向の高まりなどから、生涯にわたっての健全な心身、豊かな人間性をはぐくむための「食育」を推進することを目的とした「食育基本法」が平成十七年六月に成立しました。

「食育」とは、生きるうえでの基本であって、知育、徳育、体育の基礎となるべきものと位置づけ、そして、さまざまな経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を養い、健全な食生活を実践することができる人を育てることです。

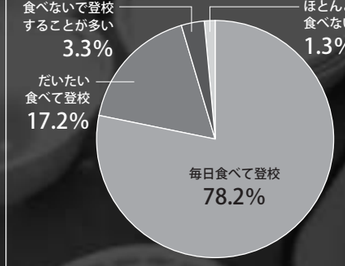
こんなふうに言われると「食育って、難しいことだなあ」と、ちょっと身構えてしまいますが、要するに「良い食生活を通じて健康な体と心をはぐくもう」ということです。

飽食のあおりで栄養のとり過ぎから病気を招く「病食の時代」になったといわれる今、改めて「食」について考えなければならないときを迎えています。

生きていくために「食べること」は欠かせないもの。「食」がなければ命は成り立ちません。だから大切な「食」について考えましょう。自分のために、そして何より、未来を担う子どもたちのために―。

自分たちで考えた朝食メニューを実際に作る丹波ひかり小の6年生たち。食生活改善推進員（くるみの会）から教わりながら調理し、朝食の大切さを学んでいます（丹波ひかり小、曽根）

毎日朝ごはんを食べて登校していますか？



（資料／町教育委員会「京丹波町の小中学生の生活と学習実態調査」）

毎日朝ごはんを食べて登校していますか―。左のグラフは町教育委員会が昨年十―十一月に実施した「小中学生の生活と学習実態調査」の中で小学四・五年生と中学一・二年生に尋ねた結果です。毎日朝ごはんを食べられていない子どもが約二二％います。

朝食は一日を元気に過ごすため、三食の中でいちばん大切な食事です。脳は睡眠中もエネルギーを消費していますので、朝食を抜くと、前の晩から昼まで半日以上、脳にわたるべき栄養がとられていない状態。これでは学習や運動に集中できません。

それは大人にとっても同じこと。朝は忙しくて時間がありませんが、親子いっしょに朝食を食べ、一日のスタートをきることが大切です。

広報 京丹波 No.22 CONTENTS

2 特集 食育
10 ［特集］まちの医療施設
16 長瀬大橋開通・アグリパークわちが開園
17 暮らしのガイド 暮らしの身近な相談役・民生児童委員
18 フラッシュ TOWN NEWS 2007
みんなの手で明るい社会を
社会を明るくする運動街頭啓発
ホース延長など機敏に
町消防団・女性消防協力隊が夏季訓練
夏本番を前に、まちの美化
ボランティアロード丹波
ありがとう、ハナさん
ALTのハナ・ホンさん帰国
須知高、3回戦で涙も、選手たちの健闘光る
夏の全国高校野球選手権京都大会
20 ［まちの元気人⑭］
佐井愛子（さいあいこ）さん（中台）
森本正子（もりもとまさこ）さん（中台）

学校で学ぶ食育

食育推進指定校として現在、食育に関する
さまざまな取り組みを進めている丹波ひかり小。
地域での体験や地域住民とのふれあい、学びあいの中で、
子どもたちは「食」と「命」の大切さを学んでいます。

丹波ひかり小の食育学習に地域の社会人講師は欠かせない存在です（丹波ひかり小、曽根）

体験・ふれあい・学びあいで食育を推進する丹波ひかり小

丹波ひかり小（今泉文雄校長）は、平成十八・十九年度の二年間、「食に関する指導普及推進事業」（京都府教委）の指定を受け、現在、食育に関するさまざまな学習に取り組んでいます。

併せて同小は、平成十八・十九年度の二年間、「コミュニティ・スクール推進事業」（文科省）の指定も受けています。コミュニティ・スクールとは、学校運営に対する地域住民の積極的な参画を推進し、さらに地域に開かれた学校づくりや学校教育の活性化をめざすものであり、同小が進めている食育の取り組みにも、地域住民が積極的にかかわっています。

丹波ひかり小の栄養教諭・堀下みゆきさん。同小での食育学習を担当しています。「子どもたちが、何を、どう食べたらいいのか考えられるようになることが大切です」

一・二・三年生は、生活科や総合的な学習の時間の中で、野菜や地域の名産・黒大豆の栽培に取り組んでいます。地域の野菜作り名人や黒豆作り名人に教わりながら自ら栽培し、食物への感謝の気持ちや命の大切さ、地域の食について学んでいます。

調理実習を指導する堀下先生

四年生は社会科の授業で、七輪（土製のこんろ）など昔の生活道具や暮らしぶりを学んでいます。

五年生は校内につくった田んぼで実際に田植えを行い、コメ作りについて学んでいます。苗の日常的な世話や生育状況を観察しながら、主食であるコメについて理解を深めています。

このように、同小が進める食育は、さまざまな体験と地域住民とのふれあい、学びあいを通じた学習が土台になっています。

調理実習を指導する、くるみの会丹波支部の寺井菊代さん（左から２人目）

社会人講師の指導が、子どもたちに響く

六年生の研究テーマは「朝食の大切さを考える」。子どもたちは家庭科の授業の中で、朝食としてふさわしいメニューを自分の力で考え、実際に作ってみるなどして、一日の始まりである朝食の大切さについて理解を深めています。

六年生の授業の講師を務めるのは、町食生活改善推進員協議会（くるみの会）丹波支部の会員である寺井菊代さん（富田）と田端春美さん（市森）。今年六月から調理実習の指導にあたっているお二人は、今では子どもたちから「先生！」と慕われる存在です。

「わたしたち教師から教わるのとはまた違って、地域の方々から教わることで、一つ一つのことが子どもたちの胸に、よく響いているのではないでしょうか」と話すのは、同小での食育を担当している栄養教諭・堀下みゆき先生。地域の方々の実体験に基づいた話は、子どもたちに伝わりやすく、学びの力も高まるなど、さまざまな効果があると話します。

調理実習を終え、寺井さん、田端さんとランチルームで試食をする子どもたち。自分たちで考え、作った料理を食べながら、二人の社会人講師から教わったこと一つ一つをしっかりと噛（か）みしめたことでしょう。

学校・家庭・地域が、一体となって食育推進へ

食育を通じて子どもたちに何を伝えるのか―。それについて「まずは、食べることの楽しさ」だという堀下先生。「食べることが楽しいと、親子共に思ってもらうことが大切です。だから、食育は学校だけでの取り組みではなく、家庭や地域での実践も重要です」と話します。

「本校はコミュニティ・スクール推進事業の指定校でもあることから、食育に関する取り組みについても、地域の皆さんの協力を得て、地域ぐるみで取り組める体制が整いましたので、これを生かして今後も学校・家庭・地域が一体となって食育を進めていければと思っています」と堀下先生は話してくれました。

丹波ひかり小が掲げる食育のテーマは、『命』と『食』の大切さを学び、体・心・頭を自らすこやかに成長させる児童の育成―。

地域住民とのかかわりの中でさまざまな体験をし、「食の大切さ」を学んでいる子どもたちは、野菜作りやコメ作り、調理実習などを通じて「作物への感謝の気持ち」を持ち、そして「作物から命をもらって生きている」ことに気づき、そこから『命の大切さ』も学んでいるのです。

調理実習後、児童たちといっしょに試食を楽しむ田端春美さん（中央）

地域の農家の指導のもと、黒大豆の種を植える2年生たち（丹波ひかり小付近、曽根）

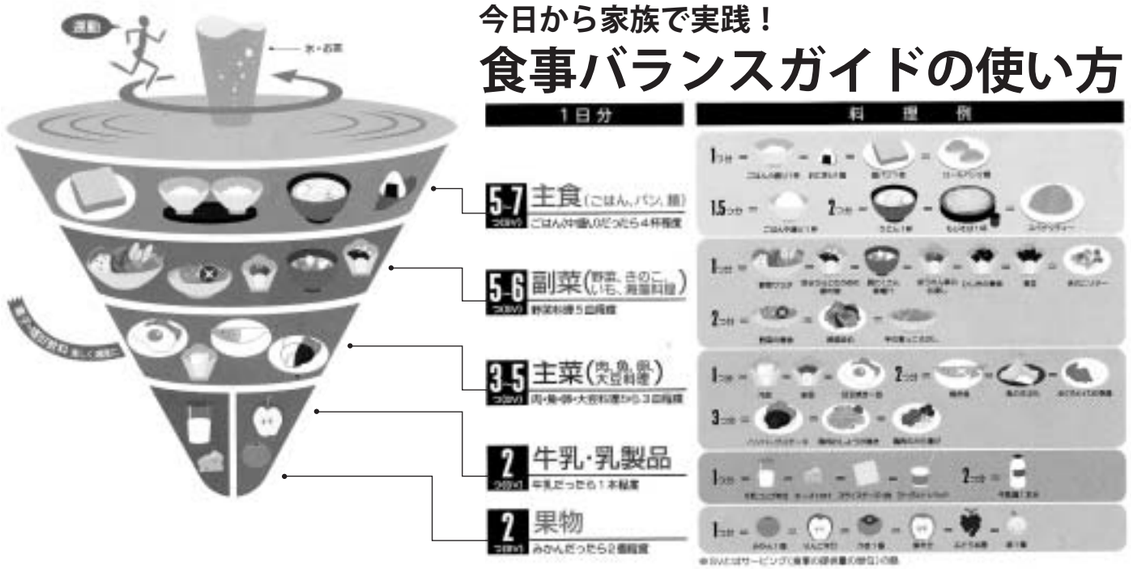
家庭で始める食育

お母さん、おいしそうにできたよ―。いっしょに料理を作ったり、食事をしたりする中で、親子共に食の楽しさを学ぶことが家庭での食育です。また、家族そろっての食卓は、家族のコミュニケーションやきずなをはぐくむ場でもあります。

今日、学校でこんなことがあったよ―。その日のできごとなどを話題にしながら食事をする中で、親は子どもの心の状態までも理解し、子どももまた、親のことを理解します。食卓を共にするということは、家族のさまざまな情報や問題を共有することでもあるのです。

近年、ライフスタイルの変化により、一家だんらんの食卓をもつことが難しくなってきているのも事実ですが、週に一日でも家族そろって食卓を囲んでみることから家庭での食育は始まります。

今日から家族で実践！
食事バランスガイドの使い方



1日に「何を」「どれだけ」食べたら、バランスが良くなるのかがひと目で分かるのが「食事バランスガイド」です。コマの中では、1日分の料理・食品の例を示しています。これは、ほとんど1日座って仕事をしている運動習慣のない男性にとっての適量を示しています（このイラストの料理例を合わせると、おおよそ2200キロカロリー）。右側の『料理例』を参考に、いくつ（SV）とっているかを確かめることにより、1日にとる目安の数値と比べることができます。

食事バランスガイドを実践するうえでの基本は、「朝食をしっかり食べる」「いろいろな食材を使う」「家族みんなで食卓を囲む」の３点です。さあ、今日からご家庭で食事バランスガイドを実践してみましょう。

朝食抜きで学校へ行く子ども、一人で食事（孤食）をする子ども、インスタント食品など偏った食事をする子ども。こうした子どもたちの食生活を改善し、生涯にわたる健康な心身の基礎と豊かな人間性をはぐくむため、家庭での食育が重要になってきています。

学校で食育を学ぶ子どもたちにとって、家庭は身近な実践の場であるはず。家庭での食育を進め、子どもたちに正しい食習慣や食事の楽しさを伝えていくことが重要です。では、家庭での食育とはどういうものなのでしょうか。

それは、家族そろって食卓を囲むことから始まります。家族そろっての食事は、子どもたちに食べることの楽しさを伝えるだけでなく、親子共に互いのことを理解しあい、きずなを深めあえる「食を通じたコミュニケーション」の場でもあるのです。

「子どものころの食習慣は、生涯にわたる食習慣をつくるといわれています。できるだけ家族そろって食事をし、家で作ったものを親子共に食べ、その家庭の味というものを伝えていってほしいと思います」と話すのは、町食生活改善推進員協議会（くるみの会）会長・下澤智恵美さん（須知）。子どもといっしょに料理を作ったり、買い物に出かけたりすることも食への関心や食べることの楽しさ、良い食材を選ぶ力を伝えることにつながると話します。

また、食育は大人にとっても重要なものだと下澤さんは指摘。同会では、丹波・瑞穂・和知の支部ごとに高齢者や中年男性、子育て世代など年代別にさまざまな料理講習を積極的に開いています。「くるみの会の講習に参加して、健康的な食生活について考えていただければと思います」と下澤さん。続けて「長寿の秘けつは『食』から。その普及のために、今後もくるみの会は力を注いでいきます」と力強く話してくれました。

京丹波町食生活改善推進員協議会（くるみの会）会長・下澤智恵美さん（須知）。
各支部でさまざまな料理講習を行い、正しい食生活の普及に努めています。「皆さん、ぜひ一度、くるみの会の講習に参加してみてください」

地域と築く食育

給食の食材となる野菜をまごころ込めてつくる農家、田植えに茶摘みにと、子どもたちの体験学習を支える地域の社会人講師やボランティアの人びとなど、地域の力が子どもたちの食育の場を築いています。

おいしい給食に子どもたちは笑顔（和知中ランチルーム、市場）。和知給食センターでは、和知小・和知中の給食を作っています。安全な食材や栄養バランスへの配慮はもとより、食物アレルギーのある生徒には、原因となる食材を使わないなど個々に細やかな配慮をもって、子どもたちの笑顔をはぐくんでいます。

「食育」の一環として和知中では、毎日のランチタイムで、給食に使われている食材や栄養についての解説を黒板に書き記し、生徒全員で理解を深めています。写真は、その解説を1年分まとめた冊子「LUNCH TIME（ランチタイム）」

地元農家に教わりながら田植えをする竹野小の五年生（高岡）

給食に詰まった、地域農家のまごころ

「地元で採れた新鮮で安全な食材を子どもたちの健康づくりに」。そんな思いで平成六年から和知地区の保育所（わちエンジェル）と小中学校の給食に食材を届けているのは、自然農法和知普及会の皆さんです。

同会が発足したのは平成二年。無農薬で化学肥料も使わない自然農法があると聞きつけた当時の農家八人で設立。自然農法で作られたスイカを実際に食べてみて、そのあまりのおいしさに魅了されたのがきっかけだったと、現在会長を務める藤田義一さん（本庄）は当時を振り返ります。

自然農法は土づくりから始まります。完熟たい肥や刈り草を使った、こだわりの土づくりです。「土が健康になると害虫が少なくなり、益虫が増えるのです。だから無農薬で消毒もしません。太陽の光・水・土の自然の力で野菜が育つのですよ」と藤田さんは話します。

自然農法和知普及会会長・藤田義一さん。「子どもたちの笑顔と『ありがとう』の言葉が何よりの励みです」

同会の会員は現在二十五人。わちエンジェルと和知給食センターから一カ月分の注文を受けると、会員たちは当番制で毎日、野菜を届けています。「会員は高齢者が多いので、とくに雪が積もった日には届けるのにも苦労がありますが」と藤田さん。「しかし、給食を食べる子どもたちの笑顔や児童たちの『いつも、おいしい野菜をありがとう』の言葉が、わたしたち会員にとって何よりも励みになっています」と笑顔がこぼれます。

成長期の子どもにとって「食」は大切。今後も安全でおいしい野菜を届け、地域の子どもたちの健康を支えるお手伝いができればと藤田会長。

自然農法普及会の会員たちの、まごころ詰まった野菜が、子どもたちの笑顔と健康をはぐくんでいます。

和知給食センター（和知小内、本庄）に、朝採りたての野菜を届ける同会副会長の片山順治さん（才原）

大切なのは、『食』を通じたコミュニケーション

竹野小では、五年生が総合学習で、「食をみつめて」をテーマに主食であるコメについての学習に取り組んでいます。田植えなど実際の栽培や生育状況の観察、収穫などの体験を通じて子どもたちの、食への関心や興味、作物への感謝の気持ちをはぐくむのが学習のねらいです。

五月二十八日には、地元農家の指導のもと、五年生十一人が田植えを体験しました。素足で田んぼに入り、最初のうちは「うわあ、足が抜けへん」「足がヌルヌルやあ」などと、おどけてみせていた子どもたちですが、田植えが始まるともう夢中に。苗を一つ一つていねいに植え、すべて植え終わると満足そうに笑みを浮かべていました。

質美小でも同じ日、毎年恒例となっている校内の茶園での茶摘みが行われました。これは、ただの茶摘みではありません。登下校時に通学路でパトロールを行っている「地域安全見守り隊」の皆さん約三十人といっしょに行う茶摘みです。

もちろん、摘み取り作業を指導するのも地域の社会人講師。質美の茶摘み名人・阪本久枝さん（行仏）です。子どもたちは、名人の手ほどきを受け、摘み取り作業に汗。その後は、大きな釜で摘み取ったお茶の葉を煎り、見守り隊の皆さんといっしょに茶もみ作業を行いました。

地域の人びととのふれあいの中で、昔ながらの茶摘みを楽しんだ子どもたちにとって、給食のときに飲むお茶の味わいは格別なものであることでしょう。

このように、給食の食材として心を込めて作った野菜を届ける地元の農家や、子どもたちの体験学習を支える社会人講師やボランティアなど地域の人びとと築く食育が活発に行われています。

ここで大切なのは、こうした地域との連携で築く食育は、子どもたちに「食」の楽しさや大切さを伝えるだけでなく、学校と地域、子どもたちと地域の人びとのコミュニケーションをもはぐくんでいるのだということ。「食」を通じて芽生えた学校と地域のコミュニケーションは、人づくり、まちづくりを支える大きな力につながるものなのかもしれません。

地域安全見守り隊の皆さんと茶もみ作業を行う児童たち（質美小、質美）

特集

まちの医療施設

京丹波町には、瑞穂病院、和知診療所、質美診療所、和知歯科診療所の、四つの町立医療施設があります。各施設とも、地域住民の命と健康を支え、守っている大切な存在です。

「患者さんの人生にとって最良の医療を―」、「信頼される医師でありたい―」。診察にあたる医師たちの胸には、地域医療に対する熱い思いがあります。

「笑顔とやさしい声かけ。そして、相手の立場になって接することをモットーに」。看護師には患者を勇気づけるやさしい笑顔があふれています。

「地域に密着した医療施設として、住民の皆さんに、大きな安心を与える身近な存在でありたい―」。医師も、看護師も、職員も、医療現場のスタッフ一同、そんな志をもって、施設のより良い運営に努めています。

大きな安心を与えてくれる身近な存在である看護師。食事や入浴の介助など心を込めた看護が、患者を元気づけています（瑞穂病院、和田）

開放感のある廊下。天窓から差し込む自然の光と木目調の内装が、やすらぎとゆとりの空間をつくり出しています

病室は広く、ゆったり

安心して利用できる病院、信頼される病院づくりをめざして

瑞穂病院

京丹波町和田大下28番地
電話86―0220

内科　外科　整形外科　小児科

瑞穂病院は、それまで丘陵の傾斜地にあったのを移転新築し、平成十七年三月に新しくオープンしました。

診療科は、内科・外科（月一回皮膚科）・整形外科・小児科の四科があり、建物は三階建て。一階には外来診察室や医事室、院内薬局、リハビリ部門、検査部門などが配置され、二階には一般病床（三十床）、療養病床（十七床）、スタッフステーションが、三階には手術室、院長室、医局、会議室などが配置されています。

同病院の経営理念―それは、「町民の健康を支えるまちづくりを推進するため、保健、医療、福祉の連携を図るとともに、人々が安心して利用できる病院を目指し、『より良い地域医療の確保』を基本として、信頼される病院づくりに努める」。

佐藤秀一郎・病院長は「地域密着型の病院として、生まれた赤ちゃんから高齢者まで地域の皆さんに親しまれる病院づくりが大切です」と話します。

今、地域医療を取り巻く状況は、医師不足などの深刻な問題があり、非常に厳しいと指摘する佐藤病院長。「こうした厳しい状況ですが、保健・福祉・医療の連携を強化し、地域の皆様の健康を支えるより良い医療の確保に努めていきたいと考えています。また、予防から介護まで包括的な保健・医療体制を築いていくことも大切です」と力強く話してくれました。

瑞穂病院が住民にとって「身近な安心の存在」になるよう、医師、看護師、職員などスタッフ一丸となって業務にあたっています。

瑞穂病院の佐藤秀一郎病院長

「地域密着」を大切に、包括的な保健・医療を推進

和知診療所

京丹波町本庄今福5番地
電話84―1112

内科　外科　整形外科

訪問診察に出発

リハビリを支える理学療法士

和知診療所は、それまで和知病院として運営してきた施設を平成十六年に改修し、平成十七年四月に新しくオープンしました。

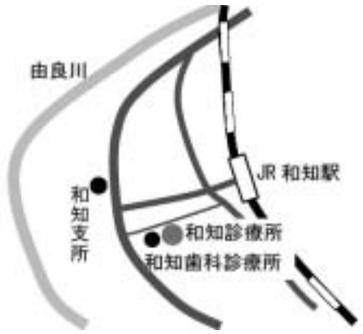
診療科は、内科・外科・整形外科の三科があり、建物は二階建て。一階には外来診察室や検査室、事務室などが配置され、二階には一般病床（七床）、療養病床（十二床）、リハビリ室、医局、スタッフステーションなどが配置されています。

健康増進から予防・早期発見・早期治療・リハビリ・お年寄りのケアまで、地域に密着した包括的な保健・医療を推進している同診療所。

「地域の皆さんが元気に過ごせることに全力を傾けていきたい、患者さんの人生が、患者さんにとって最良のものになるような医療を提供していくことが大切です」と話す中村泰也・診療所長。続けて「最先端の病院へ行かなければならない病状でもない、また、大きな病院を退院したが、自宅で療養するにはまだ、もうワンステップ治療が必要な患者さんもいます。そういう患者さんのニーズがある以上、それに全力でこたえていきたいと思います」と話してくれました。

「地域密着」を大切にしていきたいと中村所長。引き続き訪問診療、訪問看護、訪問リハビリも大切にしていきたいと話します。また、町立医療施設間の連携も必要だと話す中村所長は、「住民健診などを瑞穂病院と分担したりしていますが、今後も連携しあえる部分があれば、どんどん連携してやっていくことも必要であると考えています」と話します。

和知診療所の中村泰也所長



まさに地域に根ざした診療所は、住民に安心をもたらす大きな存在

質美診療所

京丹波町質美田中地7番地3
電話86―0586

質美診療所の開設は昭和十六年。平成十二年に移転新築して新たにスタートしました。診療科は、内科・小児科。週三日（月・水・金曜日）診察を行っています。質美地域はもとより、丹波地区の人などもこの診療所を利用しています。

ここは典型的な「田舎の診療所」だと坂本所長。「患者さんは皆さん顔なじみ。あの方は、どこそこのだれ―というように、すべての患者さんを把握できています。まさに地域に根ざした医療施設です」と話します。

「患者さんはほとんどが高齢者。皆さん畑仕事に汗を流す勤勉な方ばかりです。そういう地域の方々に、お元気で畑仕事をしていただけるよう、常に患者さんの立場にたって理解し、適切な判断をして治療していくことに心がけています」。

窓から眺める自然豊かな質美の風景は最高だと坂本所長。しかし、途切れることのない患者さんの診察に、窓の外の風景を見ている時間はないと、穏やかな笑顔で話します。

質美診療所の坂本弘宣所長

常に最先端の治療を行えるよう努め、皆さんに愛され、親しまれる診療所へ

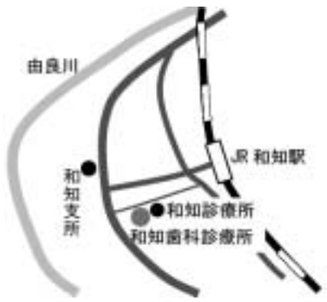
和知歯科診療所

京丹波町本庄今福13番地
電話84―1154

和知歯科診療所は、昭和六十一年に和知診療所が病院に昇格した際、独立して開業しました。

「ここでは、地域性を考えた治療を大切にしています。つまり、お年寄りや交通手段がない人、またはバスの時間が決まっているので、待ち時間があまり長くならないようにするなど、患者さんであるお年寄りのさまざまな状況に配慮した診療に心がけています」と坂下敦宏・所長。そういう点で、都会の診療とは大きく違うと話します。

「普段の診療において、常に最先端の治療を行えるよう努めています。そうやって、町民の皆さんから愛され、親しまれる診療所にしていきたいと考えています」と坂下所長。「地域の皆さんに必要とされる医療機関でありたいですね」と話してくれました。

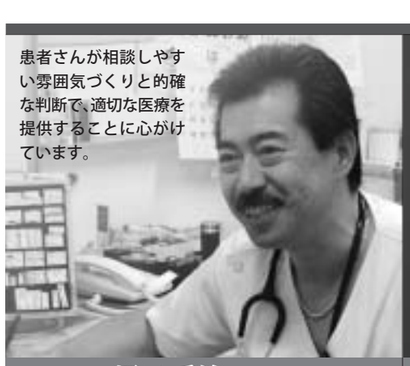


和知歯科診療所の坂下敦宏所長

Doctor 医師

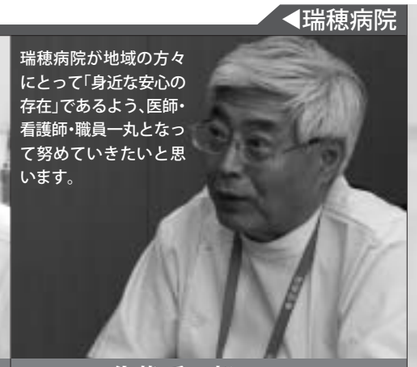
町立医療施設の医師を紹介します。
（敬称略）

◀瑞穂病院



患者さんが相談しやすい雰囲気づくりと的確な判断で、適切な医療を提供することに心がけています。

[内科]垣田 秀治（かきた ひでは る）

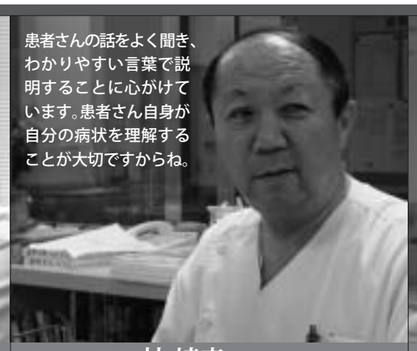


瑞穂病院が地域の方々にとって「身近な安心の存在」であるよう、医師・看護師・職員一丸となって努めていきたいと思います。

[外科]佐藤 秀一郎（さとうしゅういちろう）

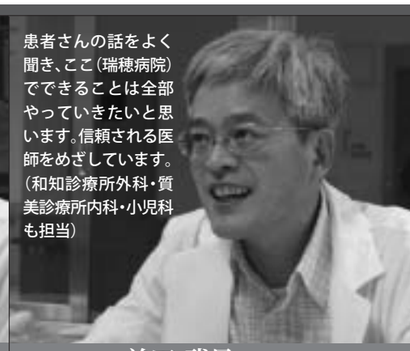
患者さんは高齢の方が多いので、ていねいに、わかりやすく説明することに心がけています。

[内科]河田 英里（かわた えり）



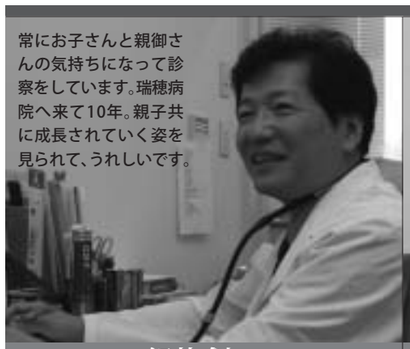
患者さんの話をよく聞き、わかりやすい言葉で説明することに心がけています。患者さん自身が自分の病状を理解することが大切ですからね。

[内科]林 靖彦（はやし やすひこ）



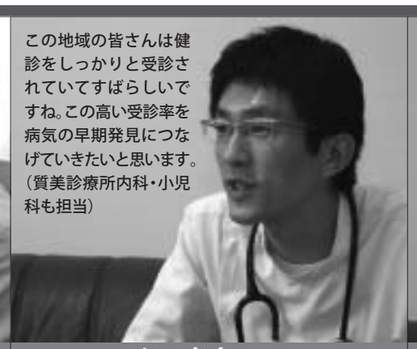
患者さんの話をよく聞き、ここ（瑞穂病院）でできることは全部やっていきたいと思います。信頼される医師をめざしています。（和知診療所外科・質美診療所内科・小児科も担当）

[外科]前田 武昌（まえだ たけまさ）



常にお子さんと親御さんの気持ちになって診察をしています。瑞穂病院へ来て10年。親子共に成長されていく姿を見られて、うれしいです。

[小児科]細井 創（ほそい はじめ）

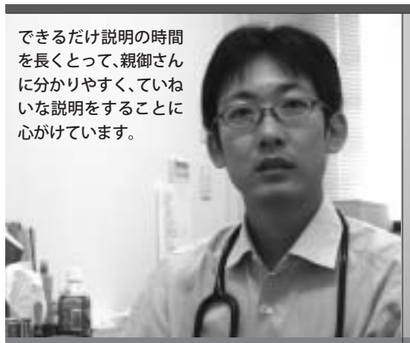


この地域の皆さんは健診をしっかりと受診されていてすばらしいですね。この高い受診率を病気の早期発見につなげていきたいと思います。（質美診療所内科・小児科も担当）

[内科]平田 育大（ひらた いくひろ）

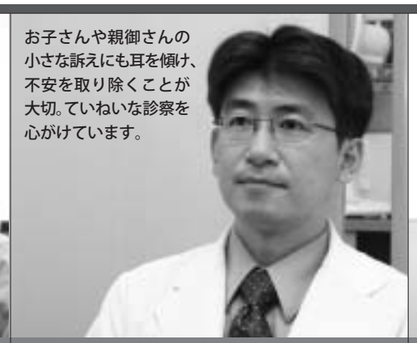
糖尿病、血液・呼吸器がわたしの専門です。見落としのない診察に努めています。

[内科]春里 一子（はるさと いちこ）



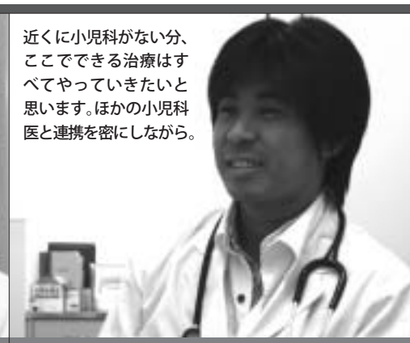
できるだけ説明の時間を長くとって、親御さんに分かりやすく、ていねいな説明をすることに心がけています。

[小児科]柳生 茂希（やぎゅう しげき）



お子さんや親御さんの小さな訴えにも耳を傾け、不安を取り除くことが大切。ていねいな診察を心がけています。

[小児科]平嶋 良章（ひらしまよしあき）



近くに小児科がない分、ここでできる治療はすべてやっていきたいと思います。ほかの小児科医と連携を密にしながら。

[小児科]勝見 良樹（かつみ よしき）

◀和知診療所

地域の皆さんが元気で過ごせることに全力を傾けていきたいですね。訪問診療・看護など地域に密着した医療も引き続き大切にしていきたいと思います。

[内科]中村 泰也（なかむら やすなり）

患者さんにやさしく、そして、最も適した医療をすすめていきたいと思います。

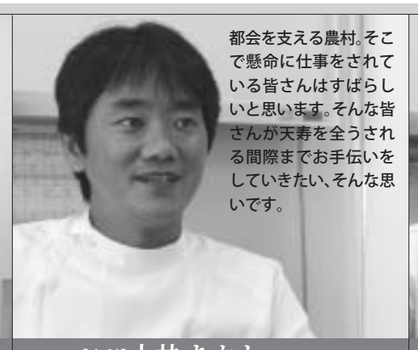
[整形外科]高取 良太（たかとり りょうた）

高齢の患者さんが多いので、わかりやすい説明に心がけています。なるべく患者さんの希望にそった治療を考えています。

[整形外科]大橋 鈴世（おおはし すずよ）

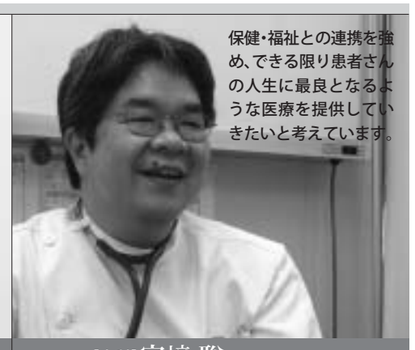
ご高齢の皆さんはとても勤勉でいらっしゃいます。だから、これからも元気に農作業ができるよう丈夫な足腰を、いっしょにつくっていきましょう。

[整形外科]山田 充彦（やまだみつひこ）



都会を支える農村。そこで懸命に仕事をされている皆さんはすばらしいと思います。そんな皆さんが天寿を全うされる間際までお手伝いをしていきたい、そんな思いです。

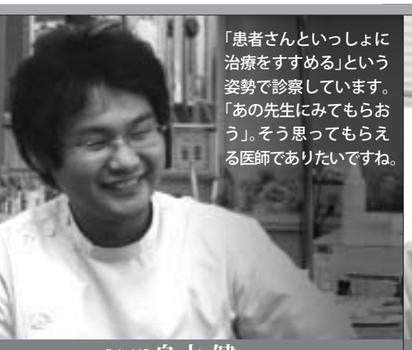
[内科]土井 たかし（どい たかし）



保健・福祉との連携を強め、できる限り患者さんの人生に最良となるような医療を提供していきたいと考えています。

[内科]宮﨑 聡（みやざき さとし）

◀和知歯科診療所



「患者さんといっしょに治療をすすめる」という姿勢で診察しています。「あの先生にみてもらおう」。そう思ってもらえる医師でありたいですね。

[歯科]舟木 健（ふなきけん）

最先端の治療を提供できるように努めています。そして、町民の皆様に愛され、親しまれる診療所をめざしています。

[歯科]坂下 敦宏（さかしたのぶひろ）

◀質美診療所

常に患者さんの立場にたって考え、適切な判断をしていくことが大切ですね。瑞穂病院との連携も重要です。

[内科・小児科]坂本 弘宣（さかもとひろのぶ）

Nurse 看護師

笑顔と心のこもった看護で、安心を与えられる身近な存在に

「笑顔とやさしい声かけ。常に相手の立場に立って接していくこと。この二点を常に心がけ、看護にあたっています」。瑞穂病院の寺谷すま子・看護師長がやさしい笑顔で話します。同病院の看護師は13人、看護助手が5人。1日2交代、24時間体制で看護にあたっています。

「地域の皆様の命と健康を守る助けになれれば。看護師一同、そんな思いで日々最善の看護に努めています」と寺谷師長。「若い看護師も増え、ベテランもフレッシュな気持ちで仕事にあたれています。医療同様、看護のレベルも上がってきていますが、技術だけでなく、『気持ちの部分』を大切にしていきたいですね」と話します。

大きな安心を与えられる身近な存在でありたい―。そんな思いを胸に看護師たちは、今日も笑顔で看護に努めています。

瑞穂病院の寺谷すま子看護師長

長瀬大橋開通・アグリパークが開園

地域活性化へ「かけ橋」

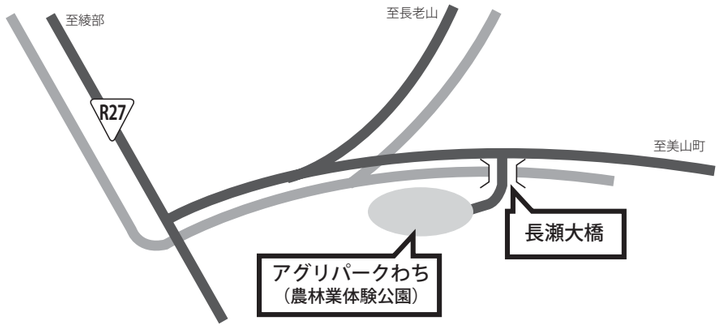
長瀬大橋の開通とアグリパークわちの開園を祝う記念式典（長瀬区主催）が七月十四日に行われました。あいにくの雨模様になりましたが、地元の長瀬区民をはじめ、町や京都府、町議会など関係者ら約七十人が出席し、待望の施設の完成を喜び合いました。

式典では、はじめに長瀬区長の松下隆さんが式辞。長年の悲願であった大橋の開通を喜ぶとともに、「アグリパークわちを拠点に区民力を合わせて地域の活性化を図っていきたい」と述べました。続いて来賓の松原町長が「同公園を拠点として、地域の皆様の創意ある取り組みによって地域振興が図られることを願う」と祝辞を述べました。

長瀬大橋開通式。テープカットをする来賓（長瀬大橋、長瀬）

記念式典で祝辞を述べる松原町長（アグリパークわち付近・大迫）

渡り初めを行う出席者たち



長瀬大橋

平成十五年度から京都府が整備してきたもので橋の長さは一八五メートル、車道幅員は五・五メートル。川面からの高さが六十メートルの逆ランガーアーチ形式のコンクリート橋梁。この形式の橋は全国でほかに七カ所あるだけで、近畿では長瀬大橋が初めての施工です。総事業費は十億五千万円。

アグリパークわち

都市農村交流による地域の活性化などを目的として、平成十五年度から町（旧和知町）が整備を進めてきた農林業体験公園です。総事業費一億五千万円。

公園の総面積は約一・三ヘクタールで、貸し農園や体験農園、果樹園、オートキャンプ場など多彩な施設が充実しています。農山村地域の美しい景観を満喫しながら農林業体験が楽しめるほか、家族や友人同士でのアウトドアライフにも最適です。

同施設の管理運営には地元の長瀬区民らでつくる運営委員会があたっています。

アグリパークわち。家族や友人同士でのアウトドアライフはおまかせです

長瀬大橋。逆ランガーアーチ形式の橋は近畿でもこの長瀬大橋だけ

暮らしのガイド

暮らしの身近な相談役

民生児童委員

今回は、まちで活躍する民生委員・児童委員の役割などについてみていきます。
民生委員・児童委員は、地域福祉の向上のために厚生労働大臣から委嘱された「民間の奉仕者」です。それぞれ担当地域が決まっており、その地域において子育てや介護など日常生活上のさまざまな問題の相談に応じ、また、アドバイスや適切な情報の提供を行うなど、「暮らしの身近な相談役」としてさまざまな活動を行っています。
※民生委員は、児童委員を兼ねています。

中学校との懇談を行い、意見をかわす民生児童委員

民生児童委員の7つの働き

1 社会調査
担当区域の住民の実態や福祉ニーズを日常的に把握します。

2 相談
住民が抱える問題について、相手の立場に立ち、親身になって相談にのります。

3 連絡通報
住民が、個々のニーズに応じた福祉サービスが受けられるように関係行政機関や施設、団体などに連絡し、必要な対応を促すパイプの役割を努めます。

4 生活支援
住民の求める生活支援活動を自ら行い、支援体制をつくっていきます。

5 情報提供
社会福祉の制度やサービスについて、その内容や情報を住民に的確に提供します。

6 調整
住民の福祉ニーズに対応し、適切なサービスの提供が図られるように支援します。

7 意見具申
活動を通じて得た問題点や改善策をとりまとめ、必要に応じて関係機関などに意見を提起します。

民生児童委員の役割

1 住民の生活状態を必要に応じて適切に把握し、援助を必要とする人の生活に関する相談や必要な助言・援助、福祉サービスを適切に利用するための情報の提供などを行います。

2 社会福祉を目的とする事業の経営者などと密接に連携し、その事業または活動を支援する一方で、社会福祉協議会や関係行政機関の業務に協力するなどの活動を行っています。

※個人の秘密は固く守られますので、日常生活に関することや子どものことでご相談がありましたら、お気軽に近くの民生児童委員にお尋ねください。担当の委員がわからないときは、保健福祉課へお問い合わせください。

主任児童委員の役割

民生委員児童委員の中に、児童福祉に関わる問題を専門的に担当する主任児童委員がいます。主任児童委員は以下の業務を通じて、区域担当児童委員の活動に協力しています。

1 児童福祉関係機関・学校・施設などとの連絡
2 区域担当児童委員への援助活動
3 要援護児童・家庭への援助
4 民生委員児童委員協議会事業の企画、実施への援助

民生児童委員協議会の活動

京丹波町では、78人の民生児童委員(うち主任児童委員６人)からなる「京丹波町民生児童委員協議会」を設置し、委員同士の連携・協働を図っています。また、旧町ごとに三つの支部を設け、毎月、協議会や研修会を開催しています。

【主な活動内容】

1 福祉施設や共同作業所への訪問・交流事業
2 保育所・小中学校との懇談会の開催、小学校卒業生に贈るお祝い品作り
3 生活保護家庭への相談訪問、一人暮らし高齢者や母子家庭の方たちとの交流事業
4 人権問題啓発研修会など各種研修会の開催、心配ごと相談事業への協力
5 他町の民生児童委員協議会との交流事業

問い合わせ先／保健福祉課　☎82−1800

みんなの手で、明るい社会を

社会を明るくする運動街頭啓発

第五十七回社会を明るくする運動の取り組みの一環として、七月三日、町保護司会や更生保護女性会の会員ら約三十人が、JR和知駅や町内の道の駅などで街頭啓発を行い、行き交う町民らに「犯罪や非行のない明るい地域社会をつくろう」と呼びかけました。

社会を明るくする運動は、毎年七月を強調月間として法務省が提唱する全国運動。犯罪や青少年の非行防止、罪を犯した人たちの更生について理解を深め、明るい地域社会を築いていこうという運動です。

買い物客らに運動への理解を呼びかける役員たち（道の駅「丹波マーケス」、須知）

ホース延長など機敏に

町消防団・女性消防協力隊が夏季訓練

町消防団（森良行団長、団員八百八十三人）が七月八日、夏季訓練を行い、丹波・瑞穂・和知の支団ごとに実火災を想定した訓練などに取り組みました。丹波自然運動公園（曽根）で訓練を実施した丹波支団では、団員がホースの搬送や延長を機敏な動作で行い、実践的な訓練の中で中継放水技術の向上などに汗を流していました。

また、同二十二日には町女性消防協力隊（山内和代隊長）の夏季訓練が町ふれあい広場で行われ、隊員約七十人が参加。園部消防署丹波出張所職員の指導のもと、てんぷら油から出火した際の消火方法や消火器の取り扱い訓練などに取り組み、防火意識を新たにしました。

女性消防協力隊は消火器の取り扱い訓練に励みました（町ふれあい広場、蒲生）

訓練に取り組む団員たち（丹波自然運動公園、曽根）

夏本番を前に、まちの美化

ボランティアロード丹波

国道九号沿道の美化活動「ボランティアロード丹波」を七月二十二日に実施。町民や町職員など約百二十人が参加し、歩道植栽の草引きやごみ拾いに汗をながしました。

この事業は、町の玄関口である国道九号の美化・緑化作業を行い、町民と行政とが一体となって地域にふさわしい道づくりを進めることを目的に毎年四月、七月、十月の三回実施しています。当日、ご協力いただいた多くの皆さん、ありがとうございました。

美化作業に汗を流す参加者の皆さん（国道９号、須知）

ありがとう、ハナさん

ALTのハナ・ホンさん帰国

ALT（外国語指導助手）のハナ・ホンさん（カナダ出身）が派遣期間の満了に伴い、七月下旬に帰国しました。ハナさんは昨年八月に来日し、瑞穂・蒲生野両中などで英語の指導にあたってきました。

今後の目標について、日韓交流について勉強したい。将来的には弁護士をめざしている」と話したハナさん。一年間ありがとうございました。

思い出の京都丹波ロードレースで（丹波自然運動公園）。右がハナさん

京丹波町の皆さんへ

JETプログラム（外国青年招致事業）でALTになったのは、すばらしいことだと思っています。多くの親切であたたかい人たちに会えたり、京丹波町の明るい生徒の皆さんと学校生活を過ごせたりして、本当に良かったです。京都丹波ロードレースに出たことも大きな思い出です。

日本にいた間は短かったですが、私はいつまでも忘れません。すべてのことに対して感謝しています。この一年間ありがとうございました。

ハナ・ホンより

須知高、三回戦で涙も、選手たちの健闘光る

夏の全国高校野球選手権京都大会

第八十九回全国高校野球選手権京都大会で須知高は、一回戦で宮津高（宮津市）と対戦し、七―三の圧勝。幸先よくスタートしました。二回戦では福知山高（福知山市）と対戦。序盤に三点を先制し、三回に一点を追加。試合を優位に進めます。

しかし、その後五回、六回で四―四に追いつかれて迎えた八回、須知は連打で五―四と勝ち越し、接戦を制しました。試合後、谷内豊監督は「毎回のようにランナーを背負う厳しい戦況も、チーム一丸となってよく踏ん張りました。粘り勝ちです。次（三回戦）も勝ってベスト八をめざします」とコメント。勢いにのって三回戦に進出した須知高でしたが、激戦の末、東稜高（京都市伏見区）に五―一で破れ、涙を飲みました。

試合後、応援にかけつけた保護者や同級生、学校関係者らからは、力を出し尽くした選手たちへ、あたたかい拍手が送られていました。

快音響かせタイムリーヒット（福知山高戦。西京極球場、京都市）

ピンチに伝令。監督の指示を選手たちに伝え、ナインを元気づけます

クロスプレー。果敢にスライディングで追加点

KYOTAMBA TOWN 人の動き

（敬称略）

七月一日付け、職員の人事異動を行いましたのでお知らせします。（　）は前任など。

■七月一日付け

和知支所長／岩崎弘一（住民課長）
住民課長／伴田邦雄（企画情報課主幹兼瑞穂情報センター所長）
企画情報課長兼人権政策係長／田端耕喜（企画情報課長）
企画情報課課長補佐兼瑞穂情報センター所長／稲葉出（企画情報課課長補佐兼人権政策係長）
企画情報課交通対策係・瑞穂バス事業所／三好稔（企画情報課交通対策係・丹波バス事業所）
瑞穂病院看護師／野村厚子（新規採用）

■退職

梅垣晋（企画情報課交通対策係・瑞穂バス事業所主任）

わたしたちの町

人口	17,537（−8）
男	8,322（−1）
女	9,215（−7）
世帯数	6,507（+6）

8月1日現在／（　）は前月比

インタビュー14

まちの元気人

佐井愛子（さい あいこ）さん 中台
森本正子（もりもと まさこ）さん 中台

身近な場所で、多世代交流。それがスポーツクラブの魅力です

左が佐井さん、右が森本さん（桧山小体育館、橋爪）

「スポーツを通じて、子どもから大人まで多世代の人が集い、交流できる。それがこのスポーツクラブの魅力ですね。地域の皆さんにどんどん参加してほしいと思います」と話すのは、瑞穂地区に四つある総合型地域スポーツクラブのひとつ「桧山わいわいクラブ」で活動している会員・佐井愛子さんと森本正子さんだ。

桧山わいわいクラブは、身近な場所で、多世代の人びとがさまざまなスポーツやレクリエーションを楽しみながら交流できる総合型地域スポーツクラブとして平成十五年六月に発足。地域住民が主体的に運営している。佐井さんは四年前に、森本さんは三年前に同クラブに入会し、毎週水・金曜日に近くの桧山小体育館でソフトバレーボールに汗を流している。

入会以来、ほとんど欠かさず毎回参加しているという熱心なお二人。「毎回参加できるのは、第一に自分自身、スポーツが好きであるということ、そして家族の理解があるからこそですね」と話す。

佐井さんは九年前に、森本さんは六年前に瑞穂地区（旧瑞穂町）に引っ越してきた。また、佐井さんも森本さんもかつては九人制ママさんバレーボールで活躍していた経験があるなど何かと共通点のあるお二人。「桧山わいわいクラブがあったおかげで、わりと早く地域に溶け込むことができましたね」と佐井さんは話し、一方、森本さんは「地域のいろんな年代の人と交流できる場所や機会は、なかなかありませんが、このクラブでなら、身近な場所で多世代の人たちと交流ができます。子どもたちと一緒にソフトバレーをしていると、自分の年齢（とし）も忘れてしまうほど楽しいですね」と森本さんは笑顔で話してくれた。

季節の移り変わりが実感でき、四季ごとに風情のある、そんな自然豊かなこのまちが好きだという佐井さんと森本さんは最後に、「健康第一に、スポーツクラブでの活動を長く続けていきたいですね」。近ごろ、日常会話の中で、少しずつ瑞穂弁が出てくるようになったというお二人だ。

編集後記

今回は食育を特集。皆さんに、食育を身近なこととして感じていただけたらと思い、学校や地域での取り組みを交えて紹介しています。「医食同源」という言葉があるように、心身の健康にとって「良い食事」は欠かせないもの。食育は子どもたちだけでなく、大人にとっても大切です。と書いている編集子自身、取材を通じて日ごろの食習慣を反省する日々。日ごろつい食べ過ぎてしまう編集子は、おそらくカロリーオーバーです。「食事バランスガイド」を眺めながら、「改善しなければ」と思う今日このごろです。▼医食同源―。特集「まちの医療施設」もぜひ、ご一読ください。（Y）

発行／京丹波町　〒622-0292京都府船井郡京丹波町蒲生八ツ谷62番地6　電話（0771）82-0200（代表）・（0771）82-3801（直通）　企画・編集／企画情報課
［ホームページアドレス］http://www.town.kyotamba.kyoto.jp　［電子メール］kikaku30@town.kyotamba.kyoto.jp